

シェイクスピアの言語における 隠れたコンテキストの役割

—「ソネット集」37番を通して—

富 原 裕 二

はじめに

言葉の意義はコンテキストによって決定される。しかし、シェイクスピアの言語においては、そのコンテキストが読者にとっては知りえない作者の個人的な思考や連想にもとづいていることが珍しくない。したがって、その言語を理解することが、それが依存しているコンテキストを復元することと等しいことがしばしばある。読者はどのようなコンテキストに依存して創作されているかを、補って解釈することを強いられるのである。シェイクスピアに特有の多義性や、語の暗示の豊かさなどはこうして生まれている。その豊かさは「隠れたコンテキスト」の大きさに負うところが多い。

「ソネット集」にはシェイクスピアの言語に見られるこのような特徴が特に目立っている。おそらく最大の原因は、それが一つの統一的な構造を意図した作品ではなかったことにあるように思える。構成意識がうすい作品では、読者と共有するコンテキストに従うという意識が希薄になりやすい。作者は、作品内に成立したコンテキストと、いまだ成立していない（あるいは、読者と共有しているとは限らない）私的なコンテキストとの区別をあいまいにしたまま、言葉を使いやすいのである。このような「隠れたコンテキスト」に依存して言語が使われているために、読者にとって理解が容易でない詩句が「ソネット集」の中には多くある。ここでは、とくに37番に絞って、それがどのようなコンテキストに依存して書かれているか、あるいは、それを理解するためにはどのようなコンテキストを仮定する必要があるかを考えてみたい。37番を選んだ理由は、比較的平明な詩であるにもかかわらず、そのなかに唯一不透明な表現（メタファー）を第8行目に含み、そのことが不透明を一層きわ立たせているからである。そして、メタファーにおいて作者が何を何に見立てるか、あるいは、何と何のあいだにパラレルを見いだすかは、「隠れたコンテキスト」の影響を受けやすいのである。

37番第8行の二義性

37番は36番で導入された「別離における愛による一体」のモチーフを歌ったものである。36番は二人のあいだに強いられた別離の悲しみに焦点を当てている。それに対して、37番の焦点は、愛による一体そのものである。36番の物理的な別離は、このなかでは、パトロ

ンである青年と作者の「わたし」とのあいだの本質的な距離感に展開する。つまり、「老いと若さ」「不運の境遇と運命に恵まれた境遇」「徳の貧困と美徳の豊かさ」など、より本質的な隔たりとして捉えられている。そして、これらの隔たりを超えておこなわれる青年と「わたし」との一体を歌ったものである。しかし、その主題を歌うかなめとも云うべき第8行が、かならずしも明快とは言えないメタファーで書かれている。Stephen Booth (1977)による版 *Shakespeare's Sonnets* から37番を下に取り出し、参考までに西脇順三郎(1967)訳をあげる。

As a decrepit father takes delight
To see his active child do deeds of youth,
So I, made lame by fortune's dearest spite,
4 Take all my comfort of thy worth and truth.
For whether beauty, birth, or wealth, or wit,
Or any of these all, or all, or more,
Entitled in thy parts do crowned sit,
8 I make my love engrafted to this store.
So then I am not lame, poor, nor despised,
Whilst that this shadow doth such substance give,
That I in thy abundance am sufficed,
12 And by a part of all thy glory live.
Look what is best, that best I wish in thee.
This wish I have, then ten times happy me.

西脇順三郎訳「老いぼれた父親が自分の元気な息子が／若々しく活動しているのを見て楽しむように／不幸な悲しい運命のため動けなくなった私にとって／君の真実が私のせめての慰めだ。／美貌でも家柄でも財産でも才智でも／どれもこれも皆、また他にも沢山／それぞれ最高なものを備えた／宝庫に私の愛を植えつけるのであるから。／私は体も不自由でなく貧乏でなく軽蔑もされない／それにこの偶像は生活の糧も沢山与えてくれる／私は君の富に満たされている／君の光栄の一部分によって生きているのだ。／こうして君のために最大な幸福を望むことが／私にとって十倍の幸福となるのだ」

このソネットの第8行には「接ぎ木」のメタファーが使われている。ちょうど台木に若枝を接ぐ接ぎ木のように、my love を接ぎ穂に、this storeを台木に見立てたものである。この限りにおいては、メタファーの構造は明快である。ところが、this storeはその前の3行(5-7行)で述べた青年の美徳の豊かさを宝庫に見立てたメタファーであることが、一義的で平明な解釈を困難にしている。少なくとも、次の二通りの読み方が可能である。一つは、store を文字どおりに「宝庫」と解することで生まれる意義であり、他の一つは、

store を接ぎ木のための「台木」と解することで生まれる意義である。Stephen Booth (1977)は次の(1), (2)の意義をあげている。

(1) I fuse myself to (and thus draw strength from) your abundance.

君の美德の豊饒に私を融合させ、そしてそれから力を引き出す (筆者訳)

(2) I add my love to your store of valuable things.

価値あるものを蓄えた君の宝庫に私の愛を付け加える (筆者訳)

(1) は storeを「台木」に見立てたもので、これまでに行われている第8行の解釈の主流である。たとえば、William Burto(1964)はこの行を "I make my love fused with and nourished by this abundance." とパラフレイズしている。あるいは、T.G. Tucker(1924)は engrafted 以下を "Grafted upon all this riches (this 'store') and so drawing life and strength from it, as a graft does from the stock." と解釈し、Dover Wilson(1966)も Cambridge版でそれを採用している。Booth の解釈(1)は、T.G. Tuckerと William Burto の二つの解を足して平均したものである。ただし、Booth が my love を myselfに置き換えていることが、論理的により細心であることについては後で触れる。一方、(2)の解釈は、「接ぎ木」のメタファーを消して、store を文字通りに「宝庫」と解したものである。これは解釈の主流ではないが、たとえば、A.L. Rowse (1964)もこの行の中から接ぎ木のメタファーを消去して、単に "I add my love to this store." と読んでいる。(1)と(2)の両義性で注目すべきことは、二つが単に store に関する literal と figurative の意義の差が生み出す類義ではないことである。(1)では青年の豊かさ(台木)が貧しい「わたし」(接ぎ穂)を満たす。(2)では、青年の豊かさ(宝庫)は「わたし」の愛を加えられて一層豊かになる。つまり、(1)の意義の焦点は青年が豊かさを「与える」ことあり、(2)の焦点は、逆に青年が豊かさを「与えられる」ことにある。つまり、二つが述べているのは、現象としてまったく正反対のことである。

メタファーの組成

このような両義性は、第8行がまったく異質の二つのメタファーから成り立っているために生じたものである。第8行を分解すると、(1)(2)の意義に対応する二つのメタファーによって構成されていることが分かる。まず、直前の5-7行で述べられた青年の美德の豊かさをうけて、それを「宝庫」に見立てると次の(a)で示されるメタファーが作られる。

(a) You are this store (of valuable things).

第8行で新たに追加された観念は、love = 接ぎ穂、you = 台木のメタファーによって次の(b)のように表される。

(b) I engraft my love to you.

この二つが一つの文のなかに合成されると、次の(a+b)が得られる。

(a+b) I engraft my love to this store. (ただし、原文は I make my love engrafted to this store.)

(a) も(b) も単独ではメタファーとして常識的で、月並みでさえある。どちらもシェイクスピアの他の作品の中に類似の例を捜すことができる。たとえば、(a) について見れば、
 "O, she is rich in beauty, only poor, / That when she dies, with beauty dies her store" (*Romeo & Juliet*, I. i. 216) (シェイクスピア作品からの引用は以下すべて Evans, G. B., (ed) (1974) の *The Riverside Shakespeare* による) あるいは、
 "pure chastity is rifled of her store" (*The Rape of Lucrece*, 69) はそれぞれ、美德にあふれた人間を宝庫に見立てた例である。(b) の love = 継ぎ穂の見立ても、一体化した愛を述べるための慣習的なメタファーである。たとえばブルータスは、
 "Yet I fear him: / For in the engrafted love he bears to Caesar" (*Julius Caesar*, II. i. 183-4) と述べて、シーザーに一体化した(接ぎ木された)アントニーの愛を恐れる。engraft と love が結びついた用例はほかにも多い。しかし、このようにそれぞれが単独では平凡なメタファーを一つに結合させることは、自動的に可能であろうか? それぞれのメタファーとしての平凡さのせいで、作者は(a)(b)を結合して一つの文にすることに、たいした抵抗を感じなかったのかも知れない。しかし、(a) と (b) とは合成するには明らかに異質なメタファーである。(a) にあるのは、財産(物質)にかかわる観念であり、(b) にあるのは、植物(生命)にかかわる観念である。(a+b) が上述のように食い違った二つの意義を発生させる原因は、異なるレベルの観念を結合した zeugmatic (くびき語法的) な組成にあるのである。

異質なものを結合させることはメタファーにもっとも基本的なはたらきである。しかし、あらゆる結合が無条件に可能なわけではない。少なくとも、(a)+(b) の結合がおこなわれるためには、store と台木とのあいだになんらかの意義の共通項が存在する(あるいはそれが作者によって発見される)必要がある。さらに、この第一の条件が満たされたとき、合成文のなかの他の語が、共有された意義に応じて、ソゴなく機能できなくてはならない。以上の二つの条件が満たされるときに、メタファーは成立する。それが満たされないとき、nonsensical な奇想になる。このような観点から見ていくと、(a)+(b) の合成文は以上の条件が部分的にしか満たされない不完全なメタファーであることが分かる。

store = 台木のメタファーが成立する範囲

J. A. H. Murray, et al. (eds.) (1984-1928) の *The Oxford English Dictionary* (以下 O. E. D.) によると、財産としての store の語義は、(7) A stock (of anything material or immaterial) laid up for future use であり、食料、家財、衣類、家畜など将来のために備えた財産の蓄えを表す。したがって、store は生活、生命を養うという含意をもって使われることが多い。たとえば、*As You Like It* のなかで老人のアダムが使う store にはその意義が濃厚である。
 "I have five hundred crowns... / Which I did store to be my forster-nurse, / When service should in my old lives lie lame" (II, iii, 38-41)

(イタリック筆者)において、store は動詞として使われているが、財産を老人を養う乳母(foster-nurse)と見なすメタフォリカルな思考を含んでいる。したがって、store に

は、たとえば類似語である treasure（隠匿の含意が強い）などとは違って、生命・生活をやしなうという意義領域をもつ点において「台木」に転用できる可能性があるのである。つまり、store = 台木のパラレルは、生活を支える力の供与と接ぎ穂に生命力の供与という相似に負っているのである。

37番のなかでも、「わたし」は老人アダムと同じように、足腰の耄碌した (decrepit (1行), lame(3行)) 老人に譬えられており、青年の比喩的な意味での豊かな財産を生きる支え (comfort(4行)) としている。実際に、このソネットの主題は、「わたし」の貧しさ (literal な意味に限らない) を青年の storeが補い満たすという内容である。「老いた父親が息子の若さに喜びを見出だす(1-2行)」こと、「運命に虐げられたものが運命の寵児である青年を生きる支えとする(3-4行)」ことは、接ぎ穂が台木の若々しい生命力によって育まれるという接ぎ木のイメージによく合致する。さらに、後半で述べられている「青年に対する思い (shadow) が私に substance をあたえる (10行)」こと、「君のゆたかさが貧しい私を満たす (11行)」こと、「君の栄光の一部で私が生かされる(12行)」ことなどは、すべて台木によってあたえられる接ぎ穂の喜びを歌ったものである。しかも、後半の詩行のなかでは、「接ぎ木」のメタファーに由来する植物的な観念に、store (宝庫) に由来する経済的な観念が融合している。substance (10行) と sufficed (11行) はそれぞれ「経済力」「衣食の満足」を、abundance(11行)は経済的な裕福を意味することができる。12行目の "by a part of thy glory I live" (君の栄光を糧にして生きる) は、パトロンとしての青年から受ける精神的だけではなく経済的な恩恵をあらわしている。

store = 台木のメタファーの問題点

store = 台木のメタファーによって成立する意義は、このソネット全体の主旨によく整合するにもかかわらず、いくつかの問題点をもっている。一つは、第8行が実際に上述の意味を表しているのであればとしたら、語法的に正確を欠く表現と見なさざる得ないことである。store = 台木を成立させるとき、同時に my love = 接ぎ穂は成立しがたいからである。青年の豊かさによって生かされ・満たされる「接ぎ穂」に当たるものは、貧しい「わたし」であって my love ではない。しかし、store = 台木と my love = 接ぎ穂のメタファーを同時に成立させるためには、第8行は青年の豊かさが my love を生育させることを述べた文であると考えざる得ないが、これは上述したソネットの全体の主旨と食い違う。このような不都合は、store = 台木のメタファーを機能させるための規制が、(a+b) の合成文に含まれる他の語にはたらきかけるために起こる。engrafted の語義として、Onions (1911) が firmly fixed or rooted、Schmidt(1902) が firmly attached を挙げているように、(b) のメタファーにおいては意義の焦点は一体の観念にある。ところが、you を this store に置き換えた(a+b) においては、engraft の意義は、store = 台木の意義に連動して、一体の観念が後退して、生育の観念が優勢にならざる得ない。したがって、合成文(a+b) のなかで、my love は原義のままで機能することに耐えることができず、実際

の意義としては *myself* あるいは *my life*を表すように機能している。生育するのは *my love*ではなく *my love*によって接ぎ木した *myself* だからである。Booth がわざわざ *my love* を *myself* にパラフレイズしているのが、他の評家に比べてより論理的だと先に述べたのはこの理由による。つまり、(a) と(b) の結合文が表現を意図しているのは、次の(c) のように表すほうがより正確なのである。

(c) I engraft *myself* (by *my love*) to this store.

store = 宝庫によって解消される問題点

store = 台木で機能するメタファーにおいて *my love*=接ぎ穂が成立しがたいことが、store = 台木のひとつの問題点である。もう一つの問題点は、たとえ第8行が不正確な形とは云え(c)を表しているとしても、その意義では説明できない部分が依然のこることである。たしかに(c)の意義はソネット全体の趣旨にうまく整合するにもかかわらず、部分的に第2連の中だけで見ると前後の関係に不透明を生み出すからである。そして、その不透明は、store = 宝庫、*my love* = 一つの財産と読むときにのみ解消される。Booth が挙げた(1)の解は前の三行に対する整合性に不明確なところを残すのに対し、一方、それが説明しがたい部分を説明することができるのは、(2)の解釈のほうなのである。第二連(5-8行)のなかで、whether で始まる3行の節の第8行目への接続は、接ぎ木のメタファーで読むとき、譲歩の関係が不透明である。その3行は、青年がもつ美德の一つ一つが、他に対する優位を主張しあって、どれもが譲ろうとしないほど美德が競合する豊かさを描いている。store はそれをまず「宝庫」のメタファーで要約し、次にそれがさらに「台木」に見立てられたのである。ここで重要なことは、第2連の論理構造は始めに行われた「宝庫」への見立てに従っているだけであり、「台木」への見立てはその論理に支配されていないことである。前3行の譲歩節は逆接的な内容をもつ帰結文を要求する。ところが、列挙された美德のうちどれかが特に優れていたとしても、*my love* を接ぎ木するためにどんな支障があるのか明確ではない。あえて推量すれば、青年の貴族的な「台木」に卑しい「わたし」の *love* を接ぎ木することへの憚りの感情が、whetherで述べる譲歩の論理を生み出したのかも知れない。事実そのような感情の存在を推定することは、けっして過剰な解釈とはいえない。第7行のなかに名誉を象徴する heraldry (紋章)の用語を読み取る評家も少なくない。したがって、台木(stock)が貴族の血統(stock)への言及を含むこともありえないことではない。さらに、前後のソネットのなかで「わたし」が青年との交際によって青年の名前を汚すことへのためらいが幾度か述べられていることも無視できない。しかし、推測によってえられる含意によって文の論理構造が決定されていると考えることにはなお無理があるように思える。

「台木」のメタファーから生まれるこのような不透明に比べて、「宝庫」のメタファーから生まれる解釈は、前3行への接続がきわめて明快である。このメタファーにおいては、*my love* は青年の美德の財産目録の中に加えられるべき財産の一つとして機能し、青年の

財産である beauty, birth, wealth, wit と文法的に対等にふるまう。列挙された四つの徳目のうち、beauty, birth は生得的な、wealth, wit はより後得的という違いはあるが、いずれも運命が青年に与えた財産である。その一つ一つのうちどれが最もすぐれているか不明であるような豊かな宝庫のなかに、「わたし」はあえて my love を付け加えるのである。その宝庫は何も加える必要がないほどすでにある豊かさで足りているので、第8行に対しては譲歩で述べられることがふさわしい。さらに、「わたし」が青年の名誉を汚す恐れがあるほど卑しいものとして設定されていることは、いま上で述べたばかりである。しかも、engraftingは通常台木の最上部におこなわれるので、青年の諸々の徳の中に最も上位を占めるものとして my loveを付け加えることさえ意味する。したがって、前3行と第8行とは逆接以外の関係では接続することは不可能なのである。

メタファーの二重性

第8行に発生する意義は、store という語が使われた二つの意義に対応して、次のように整理することができる。

財産（物質）系メタファー (a) You are this store (of valuable things).

植物（生命）系メタファー (b) I engraft my love to you.

二つが合成されて第8行の初期文(a+b)ができる。

(a+b) I engraft my love to this store.

ただし、(a+b) は一つの統一的な意義に収れんすることができず、もとの(a), (b)に対応した次の二つのメタファー文(A)(B)として機能する。

(A) I add my love to this store. (store = 宝庫、my love = 財産)

(B) I engraft myself to this store. (store = 宝庫 = 台木、myself = 接ぎ穂)

(B) はこのソネット全体の主題を表している。しかし、(B) の意義を表すためには、第8行 "I make *my love* engrafted to this store" は、イタリック部分が正確とはいえない。しかも、この意義だけでは理解できない部分が生じる。それを補うのが (A) である。(A) は前の3行から流れる財産系の観念を受けている。出所である (a) から (A) が生まれるためには新しい思考を要さない。これは作者が最後のメタファー(a+b) にたどり着くときに、間をつなぐ役割を果たしていたと思われるが、最終的な語形としては、add は表には現れずに消えて、my love だけが残っている。(A) と (B) のうち、財産系列の観念と植物系列の観念とがメタフォリカルに融合しているのは、(B) においてだけである。(A) は財産系列だけで行われた思考であり、storeは宝庫として、my love は財産としてのみ機能している。したがって、(A) は、(B) によって生まれたメタフォリカルな思考にはなじまない観念であり、普通同時に一つの文によって述べることは不可能である。それにもかかわらず、二つの観念をあたかも一つの観念であるかのように扱って作られたのが第8行であるように思える。そのなかでは、store = 「台木」が成立する意義の層には属さない観念までが、一つの文の中に合成されて一つの観念として表されているのである。

財産＝植物の隠れたコンテキスト

メタファーのこのような無理な合成が行われた原因は、財産系列の観念と植物系列の観念とを等価的にあつかう思考法が作者の中であって、この37番においてもそれが使われたためではないかと思われる。二つの系列がメタオリカルに融合した(B)のメタファーを生み出したのは、この思考法である。しかし、(B)にはなじまない(A)のような異質な観念をも盛りこんで、第8行に見られるような zeugmaticなメタファー(a+b)が生み出されたのは、この同じ思考法が過剰に適用されたことを示している。財産(物資)＝植物(植物)の思考法は、「ソネット集」全体にわたって、特に37番以前の作品のなかに目立って使われている。しかも、そのなかで、store という語には、両者を繋ぐキー・ワードとして特別な意味が与えられている。37番の storeが同居させがたい二つの意義をもって使われているのは、背景のこのような思考法の影響を無視して説明することができない。

「ソネット集」のなかでは、青年について色々なメタファーで述べられているが、代表的なものは二種類ある。一つは、property, treasureなど財産に関するイメージの系列である。もう一つは、flowerを代表とする植物に関するイメージの系列である。二つの系列は、頌歌の中でよく使われるコンベンショナルなポエティック・ディクションを踏襲したものに過ぎない。しかし、「ソネット集」で興味深いことは、二つのイメージが単に美しい価値あるものの譬えとして利用されているだけではなく、一つの主題と深く関係づけられていることである。二つの間にパラレルを認めるのは通常容易ではない。しかし、「ソネット集」のなかでは、二つが互いに等価的な関係があることが強調されている。それらはどちらも、青年という単一の主題(価値ある財産でありながらやがて滅びていく生命)を表すために使われているからである。「植物」は時間によって与えられるが時間によって奪われる。生の春を向かえ、やがて死の冬にいたる。しかし、生殖、繁殖によって永続的に存在する可能性を持つ。「財産」は時間を擬人化した運命によって与えられ、いずれ運命によって奪われる。それは植物の生命と同じようにそれ自体不毛であるが、生産性を付与するために「ソネット集」は usury を肯定している。(刪 That use is not forbidden usury, / Which happies those that pay the willing loan; / That's for thyself to breed another thee(6番)) 財産と生命のパラレルを成立させるために、罪惡と見なされていた usuryさえ肯定的に持ち出されているのである。

「ソネット集」のなかでstore という語は、いま述べた二つの系列に属する観念のパラレルを一語のなかに融合して表すために使われている。store は語義的には、先に見た「財産」「貯蓄」などの意味以外に繁殖という意味をもつ。Schmidt(1902)は語義として、(3) increase of men, fertility, population. を挙げている。実は、O.E.D.はこれを語義として載せていない。しかし storeの動詞の語義として 2.a. To reinforce, provide for the continuance or improvement of (a stock, race, breed). b. To produce as offspring; also, to breed, rear (young animals) をあげている。Schmidt の(3)は

O. E. D. のあげる動詞の意義 2. a. b. を名詞化したものである。さらに詳しくいえば、シェイクスピアの用法のなかでは、O. E. D. があげる「保存」の語義 8. Storage, reserve, keeping. が、「繁殖」の意義に偏向しているのである。このような意義の偏向によって、store という語は財産の蓄え・保存という意義と同時に、子孫をうみだす繁殖という概念を表すことができる。「ソネット集」のなかにある財産系列と植物系列の等価的な観念領域を、store という語が一語で表すことができるのは、このような二義性によってである。しかし、それがもっとも有効に適用されるのは、青年に結婚して子孫を残すことを勧める1番から17番の主題においてである。財産(store)の利殖と生命の繁殖(store)とは、どちらも青年が子孫を残すことのメタファーになり得る。青年は自然によって与えられた財産(store)であり、それを保存(store)することは、子孫を残す繁殖(store)を意味するからである。したがって、次にあげる二つの例では、財産の保存が生命の繁殖とがメタフォリカルに融合している。

11番) Let those whom nature hath not made for store,
Harsh, featureless, and rude, *barrenly perish*.
Look whom she best *endow'd* she *gave* the more;
Which *bounteous gift* thou shouldst in *bounty cherish*. (9-12)

14番) As truth and beauty shall together *thrive*
If from thyself to store thou wouldst convert; (11-2)

(イタリック・太字は筆者)

二つの store はいずれも財産の保存と種族の繁殖を同時に意味する。しかも、イタリックで示した部分には、財産系の観念が明らかに優勢であるが、そのなかに植物系の観念も見え隠れしている。*barrenly perish*, *thrive* は植物についても使える言葉だからである。

作者が store という語に対して抱いていた二つの系列が等価的に融合した思考法は、それを生み出した主題から離れて新しい別の主題を扱うときにも、store という語の背景に残って影響を与えているように思える。実際には、青年との結びつきが強まるにつれて次第に「ソネット集」の中から結婚の勧めの主題は薄れて、二つのパラレルを成立させていた源泉としての観念は消えて行く。しかし、二つの系列の等価性は、依然として後のソネットの中に残って「隠れたコンテキスト」を作っているように思える。しかも、37番では、二つの間の互換性が成立しがたい意義の層にまで、それが過剰に適用されている。なぜなら、(A)「君の財産をさらに富ませる」ことと(B)「君の豊かさがわたしを富ませる」こととを等価的に扱うことはここではできない。したがって、(A)という財産系列に属する思考が生まれたときに、store という語に対して作者がもっていた二義的な観念が作用して、植物系の観念(B)への翻訳が行われたのだと考えざる得ないのである。しかし、この場合は、青年に結婚を勧める主題を扱っているときとは違って、(A)と(B)の間には互換性があるとは云えない。それが第8行を意義の混濁したメタファーにしている原因な

のである。

おわりに

作者が言語を使うときに依存しているコンテクストが、読者に共有されたものか、個人的なものかの判定は厳密にはできない。以上述べた storeに関する観念は、作者が一連のソネットのなかで表現していて、すでに作品のなかにコンテクストとして成立させているだとあえて考えることもできるかも知れない。表現されていないものを読者は知りえないからである。しかし、作者がある観念をコンテクストとして言語を使っているために、読者がその言語的な歪みから復元して知ることができるものはある。それは作者が表現したものと見なすことはできないが、シェイクスピアの言語の表現力の豊かさは、このような明示されないコンテクストに依存した言語によって「隠れたコンテクスト」を間接的に表現していることで生まれている部分が少なくないように思われる。

参考文献

- Armstrong, E. A. (1963) *Shakespeare's Imagination*, Lincoln: University of Nebraska Press.
- Blake, N. F. (1983) *Shakespeare's Language*, London: The Macmillan Press.
- Booth, S. (1977) *Shakespeare's Sonnets*, New Haven: Yale University Press.
- Burto, W., (ed) (1964) *The Sonnets*, New American Library: New York.
- Empson, W. (1947) *7 Types of Ambiguity*, New Directions.
- Evans, G. B., (ed) (1974) *The Riverside Shakespeare*, Boston: Houghton Mifflin.
- Clemen, W. (1951) *The Development of Shakespeare's Imagery*, London: Methuen.
- Mahood, M. M. (1957) *Shakespeare's Wordplay*, London: Methuen.
- Murray, J. A. H. et al. (eds.) (1984-1928) *The Oxford English Dictionary*, London, Oxford University Press.
- Onions, C. T. (1911) *A Shakespeare Glossary*, London: Oxford University Press.
- Rowse, A. L. (1964) *Shakespeare's Sonnets*, London: Harper & Row.
- Schmidt, A. (1902) *Shakespeare Lexicon*, Berlin: Georg Reimer.
- Tucker, T. G. (1924) *The Sonnets of Shakespeare*, London.
- Wilson, J. D. (1966) *The Sonnets, The New Cambridge Shakespeare*, Cambridge, Cambridge University Press.
- 西脇順三郎訳(1967)「ソネット詩集」(「シェイクスピア全集8」(筑摩書房)所収